

『太陽熱・石灰窒素法』現地の声

品質低下・減収の原因を究明 長なす「筑陽」の安定・多収の実現

稲わら+石灰窒素 JAみなみ筑後 野菜課長 梶山勝彦さん

全国屈指の冬春なすの有名な産地

3月の下旬、よく晴れた日にJR鹿児島本線の瀬高駅で下車した。ホームには『太陽がいっぱい、自然がいっぱい、人にやさしい瀬高の農産物。ご存じですか 日本一博多なす』と書かれた大きな看板が目についた。

JAみなみ筑後瀬高なす出荷場で、営農総合センターの梶山野菜課長にお話をうかがった。

瀬高町は、全国屈指の冬春なす産地として有名である。平成10年度に「山川なす部会」と合併して、現在、部会戸数は337戸、産地規模は77ha、1戸当たりの収穫面積は22aである。昭和40年代後半から、いち早く主な出荷先を京浜市場に求め、その後一貫して、出荷総量の7～8割を京浜市場向けとしている。

平成9年度農林水産祭の天皇杯受賞

平成9年度には、「農林水産祭天皇賞」を受賞されたが、その技術的な特徴はつぎのとおりである。

- ①着果増進、整枝などの栽培管理で、長なすの技術体系を築く。
- ②接ぎ木育苗を導入、委託苗を利用した省力化。
- ③消費者ニーズを先取りして、長なす「筑陽」に統一する。
- ④良質な有機質資材の施用と、「太陽熱・石灰窒素法」で、地力低下と連作障害を克服。
- ⑤働く人に快適で環境に調和した技術。

なかでも、④の経過はこうだ。ハウスの栽培経年が長くなることもない、昭和40年代後半から生育不良の圃場が発生し、品質の低下や減収が目立ちはじめた。その原因を究明したところ、(1)地力の低下 (2)塩類集積 (3)土壌病容の発生の3つが原因であることを突きとめた。このことを部会員に知らせ、それぞれの対策として、つぎの基本技術を推進した。

栽培終了後に湛排水して除塩すること、7月下旬に稲わら(2t/10a)と石灰窒素(100kg/10a)を施用して耕起小畦立て後にフィルムマルチをしてハウスを密閉、太陽熱利用による土壌病害虫を防除することである。現在、この方法が徹底されている。

また、良質な堆肥を確保するために共同堆肥舎を設置し、個人の堆肥舎を整備したり増設した。こうした努力の結果が、長年にわたる安定・多収のなすづくりを実現させる礎になっている。

県の平均を上回る収量

なすの品種は、関東近県の中長なすとの産地間競争で優位に立つために、当時の優良系「黒陽」一本にした。その後、用途の主力が「調味浅漬け」に変わり、新しい需要に適した「筑陽」を選んだ。

しかし、本種は「黒陽」くらべて環境条件に敏感で、初期の目標収量が得られなかった。このため、組織一丸となって本品種に適した環境管理や肥培管理など、技術確立のための研究努力を重ねた。その結果、全体的に技術が向上し、現在、主産県で最上位にある福岡県の平均収量14.05t/10a(愛知県12.34t、高知県11.82t)をさらに上回る15.32tを得るまでになった。

環境調和型技術を取り入れる

また、働く人に快適で環境にも調和した技術を求めて、いろいろな工夫がされた。減農薬については、病害虫の発生予察、生態的防除、各種の耕種的防除はもちろん、ハウスの谷桁部を巻き上げ自動制御換気による温湿度の調節、常温煙霧機やロボット防除機の導入が進み、農薬散布回数は、10年前の約6割におさえられた。さらに、新しく多目的細霧システム(防除、高温制御、適温化)なども導入されている。

昭和40年代後半からは、廃プラスチックの回収が100%となり、再生や焼却などの適正処理がおこなわれている。

そのほか、さらなる農薬使用量の削減、過剰施肥の是正、ハウス周辺の環境整備、集落内での河川浄化運動の率先した取り組みなど、よい環境を守り育てるための実践例が数多くみられる。とくに、ハウス農家の健康管理には力を入れており、定期的に健康診断をおこなっている。

「いま一番の悩みは、農家の高齢化と後継者不足の問題です」と梶山課長はいうが、農協が中心となって快適な作業環境をつくり、「太陽熱・石灰窒素法」のような環境調和型の技術を取り入れているかぎり、「瀬高の農産物」はますます拡大して、厳しい産地間競争にも太刀打ちできるものと確信した。

【日本石灰窒素工業会・平沢陽一】